

「検証の進め方」による「観点」と第4回会議までの主な論点

社会経済情勢	<p>■ 1. 社会経済情勢・木材需要の変化</p> <p>(1) 木材輸入の自由化の影響はどうだったか。なぜこのように自由化が進んだのか。</p> <p>(2) 木材需要全体の減少のほか、需要の中身がかわり、価格形成が変わってきた。</p> <p>(3) 木材需要の変化に対してどんな対応をしたか。</p>
国および国関係機関の政策の状況	<p>■ 2. 国の融資造林政策・融資制度</p> <p>(1) なぜ林業は融資で推進したのか。農業同様に資金手当すべきだったのではないか。</p> <p>(2) 返済が困難である造林公社になぜ融資したのか。</p> <p>(3) 造林公社の側の対応はどうなったのか</p>
	<p>■ 3. 国の公社造林施策</p> <p>① 公社は、社会政策、地域政策、資源政策、担い手政策、(本県の場合)琵琶湖総合開発などがかぶさっている。</p> <p>② 公社は、構造改善対策の中で、森林組合の育成に育林経営として機能し、公社もそれを受け入れた。結果的に個別経営体の責任として債務が残った。</p>
	<p>■ 4. 国の公社問題への対応</p> <p>(1) 国は明確な方針や問題提起をせず、後ろめたさはあるが先送りしたので</p>
滋賀県の政策の状況	<p>■ 5. 県の政策</p> <p>(1) 琵琶湖総合開発は、造林にどのような影響があったのか。</p> <p>(2) 琵琶湖総合開発は、どの程度縛りになったのか。</p>
両造林公社の事業運営の状況	<p>■ 6. 公社の役割、事業、債務</p> <p>(1) 公社があったからこれだけ大規模拡大造林ができたが、なぜそこまでののか。</p> <p>(2) 事業(植林、保育)は適切になされたか</p> <p>(3) なぜこのように債務が多くなったのか。</p>
	<p>■ 7. 公社の目的と効果</p> <p>(1) 公共と経営とのバランスはどうだったのか。</p> <p>(2) 複数の目的があったが、優先順位を付けるべきではなかったか。</p> <p>(3) 水源かん養効果はあったのか。</p> <p>(4) 下流への効果はあったのか。</p> <p>(5) 山村振興の効果はあったのか。</p> <p>(6) 技術普及の効果はあったのか</p>
	<p>■ 8. 公社の経営の責任</p> <p>(1) 公社は経営意識がなく、意思決定をしてこなかったのではないか。</p> <p>(2) 本当の意味で経営者がいたのか。</p>
両造林公社の経営改善の取組の状況	<p>■ 9. 公社の経営の悪化と見直し</p> <p>(1) 経営の見直しの時期は適切だったのか。遅かったのではないか。</p> <p>(2) 経営の見直しの内容は適切だったのか</p> <p>(3) 外部監査、経営改善検討会議、特調、免責的債務引受の経過は適当だったか。</p> <p>(4) 計画を見直すしくみがなかったのではないか。</p> <p>(5) 公社が森林管理を止めると公社営林、公社はどうなるか</p>
	<p>■ 10. 県の責任</p> <p>(1) 県は分析評価をやっていたのか、監督責任を果たしていたのか。</p>
	<p>■ 11. 県や公社の主体性</p> <p>(1) 県や公社は自立性、主体性がどの程度あったのか。どの程度国政策にしばられたか。</p> <p>(2) 見直しが充分行えない外郭団体共通の問題があるのでないか。</p>